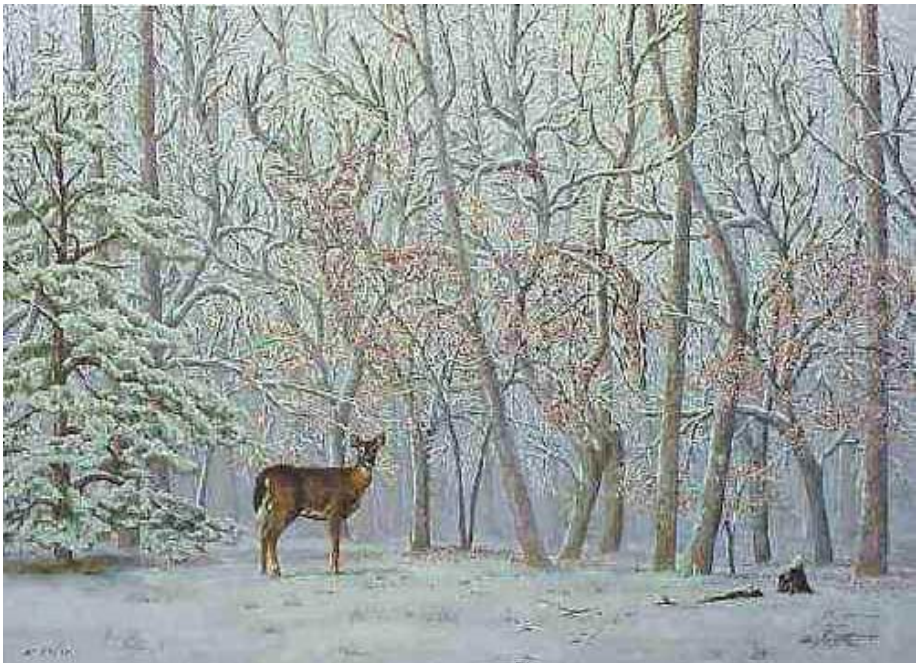
見方からの発見

境川中学校　一年七組　堀　妃呂奈



自分ではアだと見ていたものが、人から、イとも言えると指摘され、なるほどと思った経験は多いことだろう。

左の図を見てみよう。よく見ると、左下に鹿が一頭いるのが分かるだろう。さて、本当に一頭だけなのか。目を遠ざけてみてみよう。すると、一瞬のうちに、中央に大きな鹿が見えるだろう。近くから見るか遠くから見るかによって、その絵のとらえ方が違ってくるのである。

このことは、何も絵に限ったことではない。近くから見ればたくさんある花や木でも、遠くで見ると、何かの絵や文字になっていたりする。

次の図の場合はどうであろうか。仲が良さそうに笑っているおじいさんとおばあさんを見てとることができるだろう。ところがこの図、もう一つの絵を隠し持っている。図を百八十度回して見てみよう。すると、たちまちのうちに、この図は怒って言い争っているようなおじいさんとおばあさんの絵に変わってしまう。同じ絵でも、見方によって、まったく違う絵として受け取られるのである。

このようなことは、日常生活の中でもよく経験する。今、数字のカードを見ているとしよう。９のカードが逆になって、６のカードになっていたりする。

わたしたちは、ひと目見たときに、何かのものととらえているが、その一面ですべてを知ったように思いがちである。しかし、一つの図でも風景でも、見るときの距離や角度、中心に見るものを変えたりすれば、そのものの他の面に気づき、新しい発見として感じることができるだろう。そこで、ものを見るときには、ちょっと立ち止まって、別の見方を試してみてはどうだろうか。